



MY BUSINESS MY ROAD

オーナー登場

立花孝文さん

有限会社立花仏壇店
代表取締役社長

所在地 愛媛県宇和島市本町追手2丁目4-8
TEL 0895 (22) 5305
0895 (72) 3700 (愛南店)
FAX 0895 (24) 7300
宇和島信用金庫本店営業部で日本フルハップにご加入

伝統と未来が融合したモダンな店舗 感謝の心で商品を届ける仏壇店

命の尊さを伝える仕事

平成20年8月、愛媛県宇和島市本町追手(有)立花仏壇店本店がオープンした。『伝統と未来への融合』をコンセプトに設計された店舗は、洗練された現代的なデザインが和風の外観にうまく溶け込み、旧来の仏壇店とは趣を異にしている。店内は間接照明と自然光が調和して、温かな心地よさを感じられる。

「仏壇店は『藝』の商売ですが、『晴れ』のイメージが必要だと考え、従来の概念にとられない明るい店舗にしました。今は感性の時代。お客様の購買意欲を引き出す店舗づくりが求められています。それは仏壇店であっても同じことなのです」

2階建ての広い店内には仏壇、仏具、中庭には墓石も展示されている。近年では型にはまらない考え方の顧客が増えてきているため、『現代仏壇』も店頭と並ぶ。自分の生活スタイルのなかで、供養の形を真剣に考えることが大切と立花さんは語る。

「本物の商品を提供することで、当店は続いてきました。だから安易に価格を下げることはいたしません。価格は二の次に考え、その方の思いにふさわしい商品をお求めいただくのがいちばんです」
物を売るのではなく、「命の尊さを伝える」ことが仕事の意義だと立花さんは考える。

「仏壇はご先祖様を祀るものでもありますが、本来は生きていく者のためにあるもの。だから、誰かが亡くなったから購入するというものではありません。自分は生かされていると感謝し、命の尊さを実感する場所、つまりお寺と同じなんです」

時代に応じて顧客の一步先を行く商品を提供することは大事だが、生かされていることへの感謝の念はいつの時代も変わらない。モダンな店舗は、そんな精神を語り伝える場所でもある。

30歳でプロ意識を持ち、家業を継ぐ

(有)立花仏壇店は明治43年に創業され、100年の歴史を誇る仏壇店である。

立花さんの祖父・久一さんは仏壇に限らず広く箱物製品を製造していたが、需要が伸びた仏壇製造に専心するようになったという。二代目は父・浩さんが引き継ぎ、優れた技で看板を守ってきた。

しかし、長男の立花さんは家業を継ぐのが嫌だったという。クルマとバイクが好きだったことから、卒業後は運転手として材木店に数年間勤務。その後、大型トラックの運転手を経て、宇和島市津島町の奥様の実家で真珠養殖の手伝いをするようになった。

「真珠は景気のいい時代でしたが、冬場は暇になる。

広い店内に豊富な種類の仏壇が展示されている



現代仏壇も店頭と並ぶ



中庭に展示されている墓石



自然光と間接照明が調和した明るい店内



本店外観(パース図より)



そこで貝柱をきれいに洗って高松や広島市場へ送ると、キロあたり2千円くらいの値で売れるんです。そのとき初めて、商売もおもしろいと感じました。そして、よく考えてみると、本気で取り組みたいと思える仕事は家業の仏壇店だったのです」
仏壇店を継ぐと決意したのは30歳のとき。当時の業績は思わしくなく、先代にも反対されたそうだが、不安に感じることは何もなかったという。利益が出るかどうかよりも、生涯をかけることのできる仕事が見つかった喜びの方が大きかったのだ。

何のための仏壇か、地元ではどんな祀り方をするのか——背景をきちんと顧客に説明し、時代の流れを反映してニーズに答える。地道な営業販売で培ったノウハウから、立花さんは大きな自信を得た。

景気の波はあったものの、宇和島信用金庫の支援を得て、仏壇を扱う旧本店の他に仏具店と、長男で本店長の達典さんのアイデアで墓石店『夢SO(むそう)』を開いた。一昨年には、顧客の利便性を考慮して新しい本店に統合(夢SOは墓石のブランドとして継承)。3年前にオープンした愛南店と2店舗で、次代を見据えた業容を整えた。

景気の悪い時代こそプラス思考で

(有)立花仏壇店では現在、宇和島霊苑(平成17年開苑)、西予霊苑(平成21年開苑)を運営している。

「以前、傾斜地にある霊苑で、せっかく墓参りにきたのに『私は脚が悪いから』と車のなかで待っている高齢の女性を見かけたことがあり、車椅子でも行ける霊苑をつくろうと思っただけです。これも時代

のニーズだという直感がありました」

現在、経営環境は大変厳しいが、そんなときの方が冷静な判断ができる」と立花さんは考える。

「若い頃は自分の力を過信した時期もありましたが、今は創業100年の老舗の看板に感謝し、人の悪口を言わないのが信条。愚痴を言っても景気がよくなるわけではありません。今の生活レベルが普通と考え、郷土愛をもって生きることが楽しいでしょう。景気の悪い時期に建てられた本店や霊苑だから、逆に長く続くと、プラス思考で考えています」

「土に還る心を忘れない」を座右の銘に、「一生懸命に仕入れたよい商品」で、顧客に心から喜ばれる経営を心がける立花さん。徹底したプロ意識と、生かされていることへの感謝の気持ちから事業を広げてきた。将来は、命に関わることに全般に広く目を向けた事業展開の夢も描いているそうだ。

ちょっとインタビュー



立花千春さん
(奥様・専務取締役)

主人が家業を継いだ当初は、二人で営業に出かける日々でしたが、主人の方がいつも販売成績は上でした。一つのことでも済むと、次のことを考えずにはいられない、そんな人だからこそ、今の成功があるのかも知れません。男性は何かを考え、行動しているときに輝いているものですね。お互い50歳を超えたので健康に気をつけながら、主人にはこれからも夢に向かって前向きに事業のことを考えてくれるようお願いしています。